



假名
讀

改正西國立志編

中村正直原譯
中邨秋香和解

一

9
4121
1



門口 9
號 4121
卷 1



序



大倉喜八岸田吟香二氏嘗向
余陳感謝之意謂其家道隆富
致今日之盛由于讀西國立志編
有所感發興起養勤勉忍耐

陳德昌書

口村及...

中村正直原譯
中邨秋香和解



假名
讀

改正西國立志編

版權免許
明治十五年十月
有終堂藏版

41-6256

之氣象也。其他面謝者，以書致謝者，不為少。則此書之有益于世，可知矣。中村秋香氏欲使婦女童幼易讀且易解，少加陳括，可謂先獲我心。但第十一編

以下，最有裨世道人心。余深望其刻之完成云。

明治十五年十二月十七日

敬宇中村正直



（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 夫、人、心、余、等）

假名讀

改正西國立志編目錄

一名自助論

○第一編

- 一 人ハ自助けて自立つべし
- 二 勉強の人を世上の益
- 三 實地の學問
- 四 言行録ハ人の益
- 五 舌克斯畢
- 六 卯格林
- 七 維廉若克孫

⑧ カ查格伯田 リチャド・コブテン

⑨ 羅伯比爾 ロバート・ピール

⑩ 勞爾德伯路寒 ロルド・ブルシム

⑪ 伯爾宛律敦 ブルケル・リットン

⑫ 埤士禮立 チスレイ

⑬ 亞歷西士德多克夫爾 アレキサンド・ド・トクヴァール

○ 第二編

⑭ 休彌爾列爾 ヒューミルレル

⑮ 蒸氣機器の創造 蒸気機関の発明

⑯ 惹迷士瓦德 ジェームズ・ワット

⑰ 蒸氣機器の種々の用 蒸気機関の各種の用途

⑱ 紡棉機器 紡糸機

⑲ 力查阿克來 リチャード・阿克ライト

⑳ 比爾及び印花機 ビール及び印花機

㉑ 我喜斯可的及び織線帶機 ジェームズ・スコット及び織線帯機

㉒ 若瓜德及び花文織機 ジョージ・ワグネル及び花文織機

㉓ 亥爾滿並梳治機 ヘイルマン並梳治機

○第三編

④ 陶器の製造

⑤ 拉那德巴律西

⑥ 約翰弗列德力薄查

⑦ 若社宅地烏德

⑧ 天
⑨ 法
⑩ 法
⑪ 法

假名讀 改正西國立志編緒言

西國立志編の載せる所の古人の言行、能く人を
くして淬礪奮起の志念を發生せしむるは、是る者
ありて、世を利し國を益せるもの鮮少なからば、然
るを以て、憾むらくは、童蒙婦女をして、普ねく之を
讀みて、詳し其意を解せしむる能はざる事を、是
此書を編述し、需つ事ある所以なり、
故に、此書の本編原譯立志編を指す以下載する

所の古人の言行中は於て、其最も世上は益あり、然も童蒙婦女は解し易あるべき者を撰擇し、力めて通俗卑近の文躰は従ひ、且其言外は含蓄せる意味の如きは、直ちに之を書き綴りて、何人にも思考を費さざれば、一讀忽ちこれを了解せるを得せしむ、世に於て、（此の語句は）文躰卑近は従ふと雖も、まゝと時は稍高雅の語言を交ふるもの、童蒙婦女を以て之は由りて傍ら其語言の意味及び用格を知らしめんとす

るの微意、又其往々義訓此字を用ふるも此の、之より由りて或は其字義を解するの一助とるなきしめんと欲するに因る、且其語言のてよをは及び假字遣、字音假字遣等如き、故ら其用法を嚴正するもの、兒童の之を讀む者をして、こまに由りて小學校中、學ぶ所を害せざらしめんと爲めなり、（此の語句は）本編載する所論説及び諸家の嘉言少あるが故に、而して論説嘉言の概して童蒙婦女は解し難き

もの多きを以て今に往々之を省き、其中旨趣の
最も必須として且解意は難あらざる者を選び、
更し解釋の意を丁寧に加へて之を編述せ、
此書第一篇は記載せる所の、本編第一編より第
三編に至るものあり、其餘の篇を継ぎて將に漸
次は編述せんとす、

編者識

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 因、且、其、語、言、の、一、頃、の、み、に、お、も、た、る、事、等）

假名讀 改正西國立志編第一編

一名自助論

静岡 中村秋香解述

① 人の自ら助けて自ら立つべし
天の自ら其己を助くる人を助ると云はる諺
は、まさしく實地は經驗たる世は動きなき格
言まで、僅一句の言詞の中は世間人事の成就失
敗専ら此は本く意味をいと簡約は言ひ述べた
り、そもく自ら助くと云はるは、人死せざる道
は於て他人の力より便らば頼らば自ら主となる

身を助けて、自ら其地は立つをいふ、さきば自ら
助くと云ふ精神を定むるは、才智を生むる根本
にて自ら助くる民多き時、其國自然と富み榮
え、勢ひ強盛となり行くあり、凡そ自ら己を助
けて内より為出以事草の日ごと夜ごとと生ひ
茂り、年月永く經るは隨ひ益々盛なりまさり
て更は衰るへ枯るとなく、さるは他人の力に
頼り助けを受けてなせる事、縦令一旦成就せ
るも多くも其後衰へて永續せべき者ならぬ、又

他人を助くるはあたり、我より加へ添ふる力を
餘り強く用ふる時は、其人自己と勵み勉む
る心の自然は減むるものなり、さるを教師侍
傳おどの嚴し過ぐる時は於て其子弟の獨立
する志を却りて自然は妨げ害おひ、又政府の壓
制ある時、其人民は自ら助くる、精神自然は
衰へ萎んで、勢力乏しくなり行くあり、
② 勉強の人を世上の益
凡そ何事の國を分つたむ、其國總ての有様の今

日の姿に至るまで、年を累ね、世代を積つこ
其年代の人ごと、皆夫々、心を盡つし、又、肢體
を苦しめて、許多の工夫、力を用ひ、田畑を耕たけ
耘つる、業、鑛山を檢さげ、尋ぬる術、又、新規の器械を
作り、新發明の工夫を出し、或、大工、左官の職、諸
品、諸物の製造事、其外、詩學、理學、政學、諸術、諸藝
を修むる人々、昔より、種々様々、心を盡つし、思
を焦こし、手あへ、品變へ術かう、つ、つ、次第々々、工
夫を積つこし、を合せ、湊めて、今日の此有様、至

りあり、かゝる、今の世、人々、昔の人の勤
勞たる工夫、又、從ひ發明、由り、其身、別は工
夫も用ひ、世間、何らゆる、萬事、萬物、今日の姿
の便利を得るあり、是ぞ先祖が艱難、辛苦、曉は起
き、夜更て寝ねて、築き固めたる身、代家督を、袖手
よて相續せる、子孫と全く異ならば、さらば、古人
の辛苦は由り、便利の家督を相續せる、其子孫た
る、今日の人、先祖は劣らぬ、思慮を盡し、學術の
窓を曉は開き、工夫の門を、夜更て鎖して、尚も便

利は便利を加へ、後の子孫は傳ふべきなり、

③ 實地の學問

都て人の氣根よく、務めて工事職藝は出精せる
へ最る善き、實地稽古の學問にて、其上他人の之
を見倣ひ、奮發せる者多きの益あり、さまたば學校
私塾などみりて教ふる所のり終、如きは、素より
正くき學問なまども、今言ふ實地の學問は比ぶ
る時へ猶未ど學習の門戸の初歩なるの之、我々
日毎の閱歴より、心みさとり手は覺ゆる、其實益

の學校にて導びき誘なふ教よりも、數等の上は
出るりのみで、いと深切なる者といふべし、此實
地の學問は家の内にも街の中にも、舗は帳場は、
仕事場は、又は機織り針仕事田畑を耕は鋤の下
文字を寫し机の上、其他多人數集りて事務の忙
しき處へ皆實地稽古の學問所なり、之を名づる
て昔彌列爾と名のりし人の、人類の教道ありと
いひしとなん、その平常の身は行狀立振舞は
心を注ぎ、自ら其身を修めつゝ、自儘の心を制せ

るよ力を用ふる事をいふ、斯く眞實は心づけ日
毎夜毎の事は就き物よよもつ？學ぶ時、世間
の人々誰彼とあく皆其常の職を盡し、事理は適
へる道を踏みて得て、可成學校にて書冊を讀み文
字は依りて學びより、遙は優まる功能あり
さまは英國理學の大家倍根といひ、人の言は
も、世の學問の眞實は肝要ありと云ふべきは、萬
事萬物何角をえらむに、都て直ち其事實物
は就き熟く究め、審らむ味はひ察するは在り、故



よねをよそ世間の人の、自身と其身を仕あぐる
り、仕事の上より心得る事、學問よりして得るよ
り多く、今日の事より、ろろ得る事、藝事よりし
て得るより多く、身の行よ、心得る事、誓古より
して得るより多く、世の人品を見るよ、つき即て
已まが心得となるは、古人の言行録を讀みて、之
を得るより多しとぞいひたり、

④ 言行録の人の益

さいひふり、言行録中、書き記し、る豪傑の

士殊^{しと}と世上^{せうじやう}と善人^{ぜんじん}と云^いひ君子^{くんし}と貴^{たか}とぶ人の上^{うへ}と、
又^{また}、經歷^{しんりき}きたる種々^{しゆんしゆん}の事を、之^{これ}を讀^よむ人おみづの
ら勤^とめ勵^もむの心を生^{せい}じ己^{おのれ}もそまは倣^{なら}ひんと
志^しを導^まびきて、教訓^{きやうくん}となり裨益^{ひえき}とある事^{こと}甚多^{しんた}き
ゆのよして、いと手^てみづうは親切^{しんせつ}なる世^よの教^{きやう}と
いあるゆのなり、言行録^{げんこうろく}の中^{なか}より記^まし載^おりけた
る人々の、自^{みづか}ら助^{たす}かる精神^{せいしん}より耐^たつて撓^{たご}まぬ志^し
辛抱^{しんぼう}強^{つよ}き身^みの作業^{しやくぎ}まは信實^{しんじつ}の行^{ぎやう}かど、模範^{もはん}と
るべき事を觀^みて、人々各々^{おのづか}奮發^{ふんぱつ}して、いゝて吾^{われ}

身^みも此^{こゝ}の如^{ごと}き世^よは面目^{めんぼく}を起^{おこ}さむや、いゝて自^{おのれ}己^{おのれ}
も彼^かが如^{ごと}く世^よは朽果^{くくわ}ぬ名^なを留^{とど}めをやと、己^{おのれ}まを
頼^{たの}むの力を起^{おこ}し、終^{はつ}は極^{きよく}めて貧^{ひん}よして、且^{かつ}も賤^{せん}
き人^{ひと}をして、富^{とみ}と且^{かつ}貴^{たか}とき位^ゐを取^とり、芳名^{ほうな}を後^{あと}に
立^たつるよいたる、是^{こゝ}を言^い行録^{げんこうろく}の益^{えき}とい言^いふべ
き、
⑤ 舌^{しや}克斯^くス畢^ひ
英國^{えいこく}の舌^{しや}克斯^くス畢^ひを、詞曲^{しきよく}の名家^{めいけ}として世^よは貴^{たか}とま
る人^{ひと}なるり、元來^{げんらい}何^{なに}ある種^{しゆ}族^{ちやく}あり、や、分^{ぶん}明^{めい}ら

ぬ程の微賤いぢやき身みよと出身しゆしんしたる人ありけり、
 父ちちの肉にくを屠ほるを業わざとく傍かたわらら牧人ぼくじんをもあして、僅わずか
 又其日またそのひを送おくまる人ひとよて、舌しよく克斯畢スピアの幼わかき時ときよの
 獸けものの毛けをくも梳とへつ、其業わざといなつと云いひ、
 又また或あるる説せつよの舌しよく克斯畢スピアの郷村むらの學校がくに在ありて
 僅わずかに助教しよせきを勤とめしが、其後のち或あるる家いえの書役あややくとなま
 りと、又また舟子ふねこの用語ようごよいと委まかすといふくば、
 水手みづこをもちなする事ことあふんと云いひ、又また其著述ちやくぶつの
 中うちに於おて傳法教師でんぽうけしの事ことをくも委まかすといふくば、
 中うちに於おて傳法教師でんぽうけしの事ことをくも委まかすといふくば、
 中うちに於おて傳法教師でんぽうけしの事ことをくも委まかすといふくば、
 中うちに於おて傳法教師でんぽうけしの事ことをくも委まかすといふくば、

せる故寺こてらの書役しよやくありくと云いひ、又能よく馬うまの皮肉ひにく
 の分別ぶんべつをも明あきらか説ときくば、馬うま商人かんにんなりとも云
 ひ傳つたへつ、斯かく區々まじまじと説ときかせども、舌しよく氏しを實じつを
 優人ゆうじんよて、其平生そのへいせいよ心こころが事ことよ試しる物もの又また驗あまし
 て、年月ねんげつ永ながく積つみ貯たくわへ、心こころの裏うらの學識がくしきを、皆盡みなことごと
 く歌うた又また綴つり、即すなはち演戲げんぎの謠曲さうきよくといふたり、舌しよく氏し
 の凡たゞそ世間よけんの事こと一切いっさいすべて知しりたゞけまば、人
 間にんげん萬事ばんじの撮要録そくやうろくとも綿名わたなにつべき人ひとよして、性
 質しやくしつ深沈しんしんよして、噪さわあつらば、常々つと業わざを勉強べんきやうして

霎時の間も油断なく著述は心を委ねしが、其著述せし書をよむりのち、自然は心感發し、善は向ひ悪を戒む、さきハ英國人民の其行狀は益ありとて大いに世間は重んぜらる、舌氏の千五百六十四年我國永祿七年の生よして、千六百十六年元和二年は其齡五十三にて歿せし人あり、

⑥ 卯格林

卯格林は法國の加爾華德士地法國と以へる地の最も貧しき農家の子なり、其郷村の學校は往き

通ひて學問せし頃、其身は纏へる衣服として、秋の末野の蚕夫あらねとも檻褸さへ、さうも何へざる鶉衣百結見る影もあき小童あまども、天賦の才の聰敏利發並々からば見えたりけむ、バ、學校教師は卯格林を末頼母いきりのよ思ひ、童子は尚能く勉強せよ、汝今こそ此の如き敝衣を身にも纏へど、汝は必ず美麗しき衣服を着る人とあらん返せしむ勉強せよといと親切な譽め勵ましつつ、其頃一人の藥種屋あり此

學校に來り合せ、卯氏の身体の壯強にて、其人物の聰明を見て、かゝる人こそ行く末の杖柱とも頼まるべしと、卯氏に説きて自分の店舗にて藥種類を取扱ひ、其傍にて學問せば、萬事都合もよあるべしとの勧誘に卯氏も實ると諾かひ、即ても其家まで移りける、さきとも此家商業繁く、學問をば暇かけき、遂に之をば辭し去り、巴理の都に赴きて、一旦手ぬる觸れしる事故、藥種屋に奉公せむと、彼方此方と尋ねしるごと

も思えしき家もなく、馴れぬ旅路にさよあひて、心も勞き、身も憊れ、殊に望みを失ひし心弱り、ゆくりなき病をさへ得たりし、取あへば、病院に入りて養生せしむ、一時も命も危き、この里煩ひたりし、幸に卯氏の運や強ちりけん、復たび全快ありてけり、其頃夫爾克雷と云ひて、世に有名なる製煉家あり、卯氏の或る時夫爾克雷に面會したる事ありしが、元來聰敏き才子か、即ても夫爾克雷の鑑識を受け、其家の書役

となりたりしは、是より朝夕怠りなく勉強して
て數年の間勤めつゝ、終は製煉學の奥儀は達し
つ、夫爾克雷の歿して後の卯氏續きて之を繼ぎ、
製煉の學師とあり、千八百二十九年は、加爾華德
士の地は於て民委官を選びし時、卯氏の即ても
之は選ばせ、其職は就きて能く其任を盡し、其後
首尾よく此官を去り、襪褸布子に引あつて、錦の
衣綾の服耀ける名を荷ひつゝ、芽出度く故郷に
歸りしとぞ、

⑦ 維廉若克孫

維廉若克孫は北達比社の地の、當今現在の民委
官あり、父は蘭加斯德と云へる地は住居なりた
る醫者にして十一人の子ありしは、若克孫は其
七人目の子なりけり、若氏の十二の時父
の病の床に臥し、醫藥の驗うひもあらず、終はそ
の病ありけきば、其子の内にも年長けしるは皆
教育をもうけたまはせ、隣をむべきは幼き者にて、
其養育の道を絶え、皆散りしは別れつゝ、自ら

ら活計を立つるより、外より手段あらくも親類縁者の縁故を求め、彼方此方は離散しぬ、さき若氏も此時までの郷學校に在りけきども、是よりろくを立去りて、馴も習ひぬ荒仕業或る船持の雇とあり、船の傍に起き伏して、朝の曉六時より夜の九時まで露の間も、休息せびして立働く賤業をこそ営みけき、さきども若氏の性質篤實として才あるより、いつしう主人の鑑識を受け、主人の病に打卧しける頃、其寫字房に若氏

を詰させ、筆記帳合何呉と手許の事を扱ひせたり、是より少しの間隙を得し、この英國博物韻府といへる、冊數數多ある書籍を首よりして終まで、いとも委し通覧しつ、固より少しの間隙を見て、私に讀む事あまば、晝の間も見ぬるあら、祢ど、多くら夜中眠るべき時間、換へて勉めとぞ、其後若氏の因由ありて、諸外國に引合つ、貿易の業を営みけるの、固より非常に出精して、勉強する人ありし、この自然と餘分の利益を得

て大に家を興へて、今も若氏の船標の四方の海は遍ねく駛せて、地球上の萬國と互に交易をなはし至るなり、

⑧カ查格伯田

カ查格伯田の索塞といへる地の最卑微なる農家の子なり、年まど幼き頃よりして、倫敦府にてレテイと云ふ交易殊に繁昌ある市街の商家に送らるゝ、其小厮といはれたり、格氏の元來性質心敏くして、事は勤しき、其行状もいと正し

く其上自己が見聞を廣むる事は心を盡し、好んで讀書をたしめ、其家の主人の童兒の頃、學校にて學問の修行もたしめたる人あり、故に格氏の常は書を讀む事の餘り、其度は過るを見て、若や身体に障る事の有もやせんと氣使ひつゝ、常々之を戒めけり、さきとも格氏の性質好む事として書物の上は書き記しある古今の事蹟、其他の事を價なき寶と愛でつゝ、之を拾ひ、皆其心は貯へ置けり、さては格氏にこそよきとて、次

第^び利^り運^んを開^ひきつ、滿^{マン}遮^チ士^ス打^{タイ}といふ地^ちも移^り
此^こ所^{しよ}は住^ぢ所^{しよ}を定^まめ、白^ま布^まは花^{はな}の摸^か様^{よう}を印^{いん}す職^{しやく}業^{ぎやう}
をもて活^{くわ}計^{けい}を立^たて、其^あ間^{ひだ}も世^よ上^{じやう}の人^{ひと}を疑^うひ思^{おも}
ふ事^{こと}の上^{うへ}、只^ひ管^さ心^{しん}を用^{もち}ひつ、又^{また}取^と分^りけ^て衆^あ人^ん
の教^け育^{いく}とある事^{こと}どもよ、いと親^{しん}切^{せつ}は意^いを注^そぎ
つ、そも英^イ國^ぎの法^は制^{せい}は穀^{こく}物^{ぶつ}入^い口^{こう}の税^{ぜい}と唱^なめ、
一^い種^{しゆ}の税^{ぜい}法^{はふ}ありたり、格^こ氏^しは甚^まだ此^こ法^{はふ}の公^{こう}
益^{えき}あふざる事^{こと}を論^{ろん}じ、賤^{せん}を費^ひやし心^{しん}を竭^{げつ}し、終^{つひ}は
議^ぎ會^{かい}の同^{どう}意^いを受^うけ、此^こ法^{はふ}をくも廢^{たい}せしめたり、初^{しよ}

め格^こ氏^しの詞^{ことば}づらひいと拙^{ちやく}くして或^{ある}地^ちの公^{こう}會^{かい}
又^{また}出^いで、演^{えん}説^{せつ}せし時^{とき}多^{おほ}くの人の嗤^{わら}笑^{わら}を得^えたり
は、是^こより大^{おほ}く憤^{ふん}發^{はつ}し、詞^{ことば}遣^つひの學^{まな}をふし一^い途^とは
勵^{はげ}し勤^{つと}めし、遂^{つひ}は辨^{べん}舌^{ぜつ}快^{かい}爽^{さう}よて聽^きく人^{ひと}心^{しん}を
傾^{かた}むる、世^よも名^な高^{たか}き演^{えん}説^{せつ}家^かとなり、穀^{こく}税^{ぜい}法^{はふ}の反^{はん}
對^{たい}論^{ろん}者^{しや}羅^ら伯^{はく}。比^ひ爾^にの如^{ごと}き人^{ひと}す、終^{つひ}は格^こ氏^しは服^{ふく}せ
しとぞ、よまば法^は蘭^{らん}西^{せい}の國^{こく}使^しある德^{とく}路^ろ温^{おん}。德^{とく}路^ろ維^い
士^しといへる人^{ひと}、格^こ氏^しを評^{ひやう}して言^いひけるは、格^こ氏^しの
ふよそ人^{ひと}たる者^{もの}辛^{しん}抱^ぶ強^{きやう}く勞^{らう}苦^くは堪^たふまば、必^{かな}

す事業を遂ぐといふ、其證據の生存物あり、格氏
のおよそ人たる者の極めて卑賤の生きたり
とも、其人物の賢くして事業は功力のある時の
貴き位に至るといふ最よき模範と言ふべきな
り、格氏の英吉利人又賦へ堅實といふ性質の
最とも見易き目標ありと、格氏の千八百〇四年
我國文化元年は生きたり、

⑨ 羅伯比爾

羅伯比爾の今の世の最勉強ある人よして、其履

歴を聞く時、何人よりも勉強して心を用ひ力
を勞し倦む怠るといふ事あけき、如何ある難
き事といへども如何程大なる業といへども成
す遂ぐべきを知りつ、羅伯比爾の巴力門の議士
又列あり在る事四十年、功勞勲業いと多く都て
其身は行ふ事の何事となく其收結を取るまで
必だ爲し果し、又其言詞は出づる事の先豫めい
と委しく之を學びて仔細に考へ、扱後之を言詞
又述べ、又の文も筆記し、忽卒に論ぜし事あら

以、平日の事何事とあく心を竭く力を勞はる、實
又一形あらば、人又遇ひても其人の器量
隨ひ人物又依り、談話を貼せて論く導びき更
退屈はる事あり、又其氣象の年老衰へ縮まぬ
のこあはば、益々絶美の妙區に至り、新見異説を
洽なく容き、又其持論の歳月を経るに從ひい
よく熟く然も自身の見識をもて自ら善くと
定むる事なく、常は心を公みして、遍なく衆議を
問ひたりとぞ、

⑩ 勞爾德、伯路寒

伯路寒の身体最も強健にして鐵の如く、世間の
公務は勤勞ける事六十年餘、其傍ら法律學及
び政事は藝術は、夫々深く心を用ひ、何を残らば
奥儀を究め、他人は超えびといふ事なけむ、世
人の曾て之を怪しむ、伯氏の如何ある工夫を用
ひて、かく許多ある事どもを、遍なく成就ありた
るや、定めて秘傳の有る事ならんと、疑はひ思ふ
程なりける、さきども伯氏の秘傳と云ふは別な

怪しき法はふみもあふ以、唯今日ただ今日の光陰ひかりかげを一ミニユ
ートの暇ひまといへども、空しく過ぐ事なきのこ
細シ德ド尼斯密士ニリスミスといへる人或る時伯氏トリスは勸めて
謂へらく、君が力を用ふる度合とあひ、世の勉強家べんきやうかの
三人集りて成就あやうしゆあはぶべき程ほどを限り、そまよ上
をい過ま給ふお恐らく身体こゝろは害ありんと、かく
戒めらまいまいとまども伯氏トリスの年來勉強べんきやうは習ひて癖
となりたる身こゝろあまへ、何程劇しく精力せいりきを用ふる
事のありとて、儘ままを勞あはつらく事なかりきその平

常つねの爲ため以所何事ところ何事は限ら以何業あまこぎと云は以極きまめて
善よは極きまめて妙たぎある境まゝに至るを目途めととせしむを
世間よの人ひとの之これを評判ひやうばんして若し伯氏トリスをして鞋くつを
擦こく職人あやうじんとなす事あは、英國いまくに第一の擦鞋家こつてんかと
あるは何なんとさる其間そのまに勉強べんきやうして止やまさるる處ところ
とぞ以ひけるとらや、其老年ちやうねんに至り頃尋常きんじゆんじやうの
人ひとならは世よの煩わづらいし事ことを遁のがきて安樂無事あんらくむじ
の倚い子すは凭より添そひ瞌睡いねあひして、日を送らんは伯
氏トリスも此時光線法このときこうせんはふの考究かうきゆを始めて按おん出だす

心を竭し力を極めて終に功夫を成就して倫敦
 巴理の學者を集め大に之を論定せりかくて伯
 氏より律法政事は最も通曉せし人あまば公候
 議院の議題に於て律法政事は涉る事ある時
 必す之に預り列なり又其藝術は力あり
 若爾日第三の時代文藝學術の人と題せし
 著述を繙き閱て知るべしとぞ伯氏は千七百七
 十八年我國安永七年に生れ千八百六十八年明
 治元年其齡九十一にて歿せし人あり

伯爾空律敦

伯爾空律敦は英國の貴族に生れ何一ツとして不
 自由なき最安樂なる身分なきに朝は馬を獵野
 に馳せ夕は車を演劇に駐め又倫敦の都に在り
 ては花より紅葉に酔ひ絲竹管絃の娛樂を
 極め或は遠く蒸氣に乗りて巴理維也納羅馬
 遊び名所を尋ね古蹟を訪ひ金を抛ち豪奢に誇
 るに大方貴族の常なるに獨り律氏を此の如き
 安樂逸豫の事を嫌ひ只一筋は文學に心をよせ

て勉強し著述の力を竭しけるが、始めて著はく
たゞ書は野邊の草花と題けたる、歌詩の體か
るものなまじり、世間の評判よろしくはて大に
人母毀らまけまば、更は「ファルクランド」と題せ
る小説本を作り出し、是にて世間の誹毀をば取
りへさんとなくたゞ、そまきさへ評判いと何
しく、まましく人の誹笑をとりつ、一回あはば二
回までもかゝる失敗をとりたる上、並大抵の
人あらは、志折を氣も挫け、著述の業を抛棄べき

又、律氏の益々心を勵まし、是より更は勤めて書
を讀ままじり工夫の力を盡して、其後一年あ
らば、ペルハムと云ふ書を書はたりたり、
大に世間は賞せまき大評判をそ得たりたる、是
よりして後三十年、引も絶えせは著述をあしつ、
其書の小説、演戯曲、史類、歌詩、文章、皆盡く
世に稱らまき、其名世上に轟らまけり、律氏の千八
百。五年、我國文化二年に生る、

⑤ 埴土禮立

埴士禮立ヂスレイリの其始もちめ、律敷リツシキと同おなく文學を専めら修まめ、人あり、是こゝも屢々あま敗北やぶを取りつ、さきども志こゝろ甚篤しつあつく勉つとめ勵むめて己やまざり、つらば、終まはる最つとも芳よしは、き名なも世よの中なかは得うるは至いたる、始まめて二部ふたぶの書しよを著ある、之これを世せ上あり出いし、大おほい人の誹そ譏ぎを受け、彼かの作ま者の顛ま狂きやうありと嘲あざ笑わはさたり、埴チ氏ぢの心こゝろとめ、益えき工夫くふ又また力ちからを用もちひ、後のち著ある、一ひと部の書しよを匹ひ類るいなき妙めう筆ひつありとて、大おほい人を驚おどろせり、埴チ氏ぢ

好このみて辨べん論ろんをなしたりけるが、其始そのめ百姓ひやくしやう議ぎ院いんの演えん説せつは詞ことば鋭えいとく聲こゑ高たかく、論ろん辨べんせ、つらば、場ば所ところ馴なまき、さき、一ひとつの詞ことばを言いひ出いし、毎ごとく、多おほくの人の笑わらを取りつ、此この時とき埴チ氏ぢの演えん説せつの收を結むすは臨まて言いひける様さま、予よを平ひら生なま幾いく度どとあ、許あま多たの事ことを始まめたり、其仕し始はめたる事ことと、つらば、必かなず果はる、其功いさ績せきを見みざる、あ、さき、今日けふ為なり、始まり、此この演えん説せつも今いまこそ、諸しよ君くんは哄わら笑わを受け、以もちな、諸しよ君くんの必かなず予よが議ぎ論ろんを求もとめて

聴うる時何るべし」と其席を退ぞきける
其後埴氏の辨論ハ果して公會中ハお以ても、
雄辨無雙と稱せし世上ハ驚嘆せしよけり、
お不よそ世人の常として一回失敗を取る時ハ、
心憶して氣を喪ひ即ち退くならひなる所、埴
氏の誹笑を受る毎ハ却りてまきく奮發し終
り効をば立てたりたり、其常々ハ心ガけしを發
めて己きの至らざる所を補ひ演説の席ハ就き
ての容儀を整へ言詞遣ひの法を習ひ巴力門の

故事古實を洽ねく記憶なさんと思ひ年月久し
く怠らば勤め力ハ空しくし、巴力門の論辨
家といふ名を公ニ呼ばまつ、大ニ志をば得と
りしとぞ、埴氏ハ千八百。五年ハ生れし人なり、
⑤亞歴西士。徳。多克未爾。
亞歴西士。徳。多克未爾と云ひし人を父ハ法國の
いと貴き位を有ち、其母ハ世ニ名を志し、馬
爾士海伯氏の孫ニあたる人にて、志ある家柄
高きをめて、其年ハまど若草能緑ニもゆる二十

歳を僅ひよ一ひ超こえたるのこよて、華瑟爾士とい
 へる地の聴訟官きんそうくわんに任まけけるが、多氏たしの自みづから思おもへ
 る様やう吾われ此官このくわんに任まんぜし、身みは其程そのほどの功勞こうらうの有あり
 て受うけたる事ことは何なにも、全すべく父母ふぼと家柄いへらとに依より
 るののとこそ云いふべきなれ、さきば是こゝより官くわんを
 ば辞しして吾われ力をちからをりて當あた然ぜんある後のちの榮譽えいよを取とる
 べきなりとて、即すなはちても辞表しひょうを書かき認まめ斷然だんぜんと
 て職しやくを致いたし合衆國がくしやうこくに遊歴ゆうれきして專まら學まなびを修しゆめた
 里多氏りたしの元來もとより其性質せいしやう急いそる事ことを甚ただ嫌きらひ道行みちゆく

時ときも休やすむ時ときも心こゝろを常つねに工夫くわふに用もちひ、惜うら乎うとい
 る事こと零時ぜいじもあらず、或ある時とき人ひとは語かたりて云いひ、
 世間よこしまの人ひとは言草いひくさは悪日あくひと言いひて憎にくむ日ひあり、是
 いたづらに費つやしたる日ひを指さしてこそ云いふべ
 きなき、いふ分毫ぶんごうの間まといふとも、空くわしく光陰ひかげ
 を失うかひたるは、最いも懊悵おうやうしく心憂こゝろいと、又また或ある
 友ともは贈あづりたる書簡しよかんの中うちに述のべける人ひとの斯世このよ
 を經歷きんれいする事ことは、寒氣かんきに強つよき道みちを行ゆく如ごとく、寒氣かんきま
 ちほす強つよき地ちにて足あしの運歩うんぷも夫それはつと、いよ

いよ速く行らざるべからば、人の心の大なる病
害、猶此寒氣の如くなまば、此寒氣より勝ん
とするのみならず、能く其心を運らば用ひ又友達と諸
共ニ事業や學術を勉め行ひ、霎時も油断する事
ありきと、多氏の平日自己の力を充分盡して自
己を頼むを、第一の目的となしつ、然まども他
人の資助を受け、また扶掖を得る事も亦世に欠
くべからぬ事として、深くも之を招認めたりと
るのふよそ世間の人、誰彼となく世の中を經

歴るに就きては、おのづから、多少の差異のある
はもせよ、おおよそ他人の資助を受けざる人
のかけれがあり、多氏の千八百。五年、我國文化
二年に生れ、千八百五十九年、安政六年其齡五十
五にして歿せし人あり、

假名 讀 改正西國立志編第一編終

